
ライトのハチャメチャトリップ ライト達の旅改正版

守り人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライトのハチャメチャトリップ ライト達の旅改正版

【Nコード】

N25130

【作者名】

守り人

【あらすじ】

ライトの旅があまりにもヒドいので書き直した物です
もともと文章力が皆無なので変わらないと思いますが……

ハチャメチャライフ0（前書き）

新しくなったライトの旅！
楽しんで見て行って下さい！

ハチャメチャライフ0

此処は人間が存在しないポケモン達だけが平和に暮らす世界
しかし、ある時この平和な世界は平穩を崩されてしまうのだ
今から綴るこの物語は崩された平穩の被害にあったある一匹のピチ
ューが繰り広げるハチャメチャな大冒険のお話である……

「ねえ、お兄ちゃん本当に行っちゃうの？」

ピチューは兄であるであろうピカチュウの尻尾を掴んだまま問いか
ける

「ああ、でもライト心配すんな、兄ちゃんは絶対帰ってくるから、
な？」

それにフォースもライトの兄ちゃん何だろ？俺が行ったらお前がラ
イトを護るんだろ？だからそんなに泣くな！笑って俺の事を見送っ
てくれよ？」

ピカチュウはライトと言われたピチューの頭の上に手を置きくしゃ
くしゃっと撫でた

そして、その隣で泣きじゃくっているフォースの涙を吹いてやる

「うん！」

「う、うん……」

「よし！良い返事だ！ライト！フォース、良い兄ちゃんになれよ？
親父とお袋も元気だな！」

「うん！バイバイ兄ちゃん！早く帰って来てね！！」

その後ろで悲しそうな顔をしているライト達の親達、ライトの親達は知っていたのだライトの兄はとても危険な旅に出て帰って来ない可能の方が高いと言う事を……

それから8年後……

皆が寝静まった頃リステ地方のある一つの家で少年がこっそりと旅へ出かけようと企んでいた

「もう親父達は寝たかな……」

少年はかぶっていた布団から抜け出して周りを伺う

「兄貴、死んだなんて嘘だと俺は信じてるぜ……」

少年は自分の部屋にある一枚の写真を手に持ち、その中で自分と楽

しそくに笑いながら写っているピカチュウに話かける

「……………こんな事してる場合じゃねえな」

写真を撮しまうと、自分のお気に入りの青い飛行士がつけるようなゴーグルと青いマントを羽織る

このゴーグルとマントは少年のお兄ちゃんから貰った宝物だ
そして、少年はこの日を待ち望みずっと貯め続けてきたお金をマン
トの内側についているポケットにしまう

「後は置き手紙を……………いや要らねえか……………」

少年はそのままこっそりと外に出ると周りをキョロキョロと見回し
てから近くの森に走って行った

「この日をどれだけ待ち望んだ事か……………」

少年は森の中で開けた場所に隠して置いた青色のシンプルな気球に
乗り込み火を付ける

「後は風の吹くまま気の向くままか……………」

完全に浮かび上がった気球の火を緩めたりまた付けたりを続けて気
球の操縦を続けていた少年だったが、疲れたのか深い眠りについた
のだった

ハチャメチャライフ 1

「じゃあ、お父さん行ってくるね！」

「ああ、遅くならないようにな」

リステ地方の東に位置するシュイ地方のバウム地方にあるフシギダネのつぼみの部分を模した家の扉が開き、一人のフシギタネが飛び出してくる

「ん？」

鼻歌を歌いながらフシギタネは自分のお気に入りの海岸までやってきた

「ん？」

海岸までやって来たフシギタネは海岸に青くて大きい物が横たわっているのに気が付いた

（あれは何だろう？）

気になったフシギタネは青い物に近づいていったそして、青い物の隣に黄色い生き物が倒れているのに気付いた

「た、大変だ！」

フシギタネはすぐに駆け寄って声をかける

「大丈夫？起きて、起きて！！」

「っわ！な、なんだ！？『アイアンテール』！！」

起き上がった黄色い生き物はびっくりしたのかフシギタネにアイアンテールを放った

「ぐはっ！」

アイアンテールを食らったフシギタネはそのままの凄い勢いで吹っ飛び途中の岩を破壊した後砂浜で何回かバウンドした後止まった

「いやあ、わりいわりいいつもの癖でさあ」

フシギタネを吹っ飛ばした張本人は頭をポリポリかきながら吹っ飛んだフシギタネに近づいていく

「う、うん……」

ふらふらしながらフシギタネは立ち上がった

「俺はライト、気球で旅するピチューだ！今回あったのも何かの縁だよろしくな！！」

「まだ頭がクラクラするよ、僕はグリーンよろしくね！」

「所で此処どこだ？」

「此処はバウム地方の緑溢れる地シードシティだよ」

「此処がシードシティか、本当に木が沢山あるな！」

「良かったら僕の家に来ない？」

グリーンはツタで自分の家の方向をしめす

「っお！！サンキューな！」

ライトはグリーンの後を追って走っていった

ハチャメチャライフ 1（後書き）

やっと出てきました

ピチューのライトとフシギタネのグリーンです！

ライト

「やっぱり俺らはメインキャラなんだな！」

当たり前でしょ〜

グリーン

「新しい僕達を応援してね！」

ハチャメチャライフ2

「ちょっと待て!!」

グリーンの家に向かって行こうとしていたライトは何者かに呼び止められた

「何だよ!……っち!」

とつさにライトはグリーンを突き飛ばし、真後ろにアイアンテールを放つアイアンテールにシャドーボールが当たり拡散して消える

「どうやらお前なかなかやるようだな……」

「で、お前はだれだ?」

「俺か?良いだろう、どうせお前にはここで消えてもらうんだからな!俺の名はアスモだ!!」

突如、空から黒い物体が落ちてきた、見ればそれはヘルガーだった

「ふん!やれるもんならやって見ろ!グリーン、あいつの事知ってるか!」

「聞いた事がある、無差別に人を襲って何の目的も無しに傷つける奴だ!もう何人も被害にあっているんだっけ?」

「どうやら、俺の名を知ってるようだったな!俺ってもしかしたら有名人!?!」

アスモはヘラヘラと笑っている

「笑っていられるのは今の内だ…っな！」

ライトはそう言つと高速移動で一氣に近づきアイアンテールを放つ

「！……っぐ……！」

アスモはバックステップで紙一重でアイアンテールを避ける

「ふゝん中の上つて所かな？でももう終わりだ『メガトンパンチ』
！！」

ライトはもう目で追えないほどの速さで近くと強烈なメガトンパンチをアスモの顔面に振り下ろした

「グハ……！」

アスモはそのまま吹っ飛び崖に激突し崖に深々と埋まってしまった

「ありやりや、埋まっちゃったよ、グリーンこいつ引っ張り出すの手伝ってくれ……」

「う、うん」

「「せ」の……！」

ライトはやつとの事でアスモを引っ張り出すとアスモの顔に水をぶっつけた

「っっ！」

水をかけられたアスモは飛び起きた

「おい、グリーンこいつをぐるぐる巻きにしてくれ、警察に持つてく……」

「待って下さい兄貴！」

「は？兄貴？」

ライトは首を傾げる

「はい！兄貴です！俺、兄貴に惚れました！」

「おい、グリーンこいつ頭強く打ちすぎたようだ無視して行くぞ」

「う、うん……」

グリーンは何か訳がわからないと言った様子でライトに自分の家を案内し始めた

「あ、兄貴い、そりゃあないですぜー！」

もう泣き出さんばかりである

「っち、仕方ねえな……お前を警察に連れて行くのかと思ったが止めるわ、面倒だ」

「いや、兄貴、俺は警察に行きます！足洗って兄貴の後についてい

きます」

「はあ」

つくづく面倒なのに合ってしまったと思ったライトであった

警察にて

「つー、わけで俺がこいつを更生するし、保釈金も負担する」

ライトは警察で話合っていた

「うむ、保釈金も確認できた、アスモは保釈だ」

「うう、兄貴ありがとうございます」

アスモは泣き出してしまった

「よし、グリーンやっとお前の家に行けるな！
道案内頼むぞ！ー」

そしてやっとライトはグリーンの家に向けて歩きだした

ハチャメチャライフ3

「ところでアスモはなんであんな事してたんだ？」

「うーん、俺も良く思い出せないんですよ、気付いたら傷ついた人が目の前に転がっていたり、俺が師匠を襲った記憶もあいまいなんです」

グリーンの家に向かいながらライトとアスモは話をしていた

「そりゃ不思議だな……考えられるのはアスモが多重人格者、それが洗脳されたかだ

アスモお前誰かに襲われて拉致されなかったか？」

「っあ、お袋が言うには俺が1ヶ月ほど行方不明だったらしいんだけどその記憶もあいまいなんですよ」

「それでわかったよ、お前誰かに洗脳されてたんだ
テロリストがたまに使う手段さ

意識を朦朧とさせた状態で、例えば。さんの写真とある本を見せながら、この本を見たら。を撃てって言いながら何日間も監禁するんだ、そのしてその事を鮮明に焼き付け何事もなかったように家に帰す、意識が朦朧としていたからその時の記憶も残っていないがある本を見ると焼き付いた記憶のせいで無意識で。さんを撃ってしまうって事だな……」

「兄貴俺また人を襲ったりしないですか？」

アスモがライトの話を聞いてビクビクしながら聞く

「ん？大丈夫だお前が人を襲ったら何回でも地面に埋めてやるから」

ライトは親指を上突き出してグーとやる

んな事している内にグリーンの家についたらしい

「ライト、ここが僕の家だよ」

「へへ、立派な家だな」

「ライトもアスモも入って、入って！！」

ライト達はグリーンに言われるままグリーンの家に上がっていった

それから数時間後

「うめえ！特にこのキノコと魚介類のクリームパスタなんて最高だぜ！」

ライトはパスタに夢中になっている

「このオレンの実ジュースもとてもおいしいし！」

「「幸せだ」！」

ライトとアスモが声を揃えて言った

「ライト、アスモ今日は僕の家泊まっていきなよ！」

「マジか！？だったらお言葉に甘えさせてもらっぜ！」

その日のグリーン家はいつもより数十倍賑やかだった

ハチャメチャライフ4（前書き）

今回はライトの実力？とアスモの実力&秘密が明らかになります

ハチャメチャライフ4

「グリーンじゃましたな!!」

グリーン家でライト達は一泊した後グリーンに別れを告げていた

「ふふふ、実はお別れじゃないんだ!」

意味ありげな不思議な事を話したグリーン
ライト達もその意味が解らず首を傾げている

「僕もライトの旅について行く事にしたんだ!
お父さんからも許可を得たしね!」

「っお!そうか?だったらこれからよろしくな!」

こうしてライト一向にグリーンが仲間に加わったのだ

「そうそうライトこの町の闘技場でバトルの大会が開かれるんだ、
良かったらこのメンバーで挑んでみない?」

グリーンがバトルと言った瞬間ライトの耳がツピクッと動いた

「なんだって!?!よっしゃ!早速エントリーしに行こうぜ!」

ライトはそう言うが早いがポカーンとしている二人を置いて町にある闘技場へ物凄い速さで走って行ってしまった

「あ、兄貴速すぎますよ」

ヘトヘトになりながらアスモ達はエントリーを終えたライトの元へたどり着いた

「そうそう、バトル大会はもう始まるみたいだぜ！
ギリギリのエントリーだったらしくてさ」

ヘラヘラ笑いながらライトは選手達に個別で与えられた部屋に行ってしまった

「はあグリーン早く兄貴の所へ行こうぜ！」

「うん！」

アスモとグリーンは実に平凡な話をしながらライトの入って行った部屋に入って行った

「さあ始まりました！バトル大会最初のバトルは昨年の準優勝チームのブラックローズと今年初参加のチーム雷蒼【ライソウ】だ！」

会場は最初に昨年の準優勝チームのバトルが見れると思いますすでにヒートアップしている

「ブラックローズの一番手はグラエナのハヤテ選手、対する雷蒼の一番手はピチューのライト選手だ！」

「子供ごときが僕に勝てる訳も無いのさ！」

「っけ！そのお前の常識を覆してやるよ！」

「ファイト！」

審判の合図と共に会場はさらにヒートアップした

「君に先手を上げるよ！」

「じゃあ遠慮無く戴くぜ！」

『アイアンテール！』

ライトは一気に踏み込みそのまま体全体を使いアイアンテールを放つ
その間わずか0.5秒

あまりの速さにハヤテもついていけず直撃する、さらには声を上げる事さえ許されずそのまま地面に倒れふせた
これをみた会場と審判もポカンとしている

「うゝん雑魚だな、これならアスモの方が強いな……」

「……………！しょ、勝者チーム雷蒼のライト選手！」

審判が声を上げるしかし会場は静まり返っている、それもそのはず
会場では何が起こったのかが全くわからなかったのだ

「楽勝楽勝！次アスモやれよ！」

そんな中一人声を上げるライトどうやらアスモと交代する気らしい

「わかりました兄貴！」

ライトに指名され前に出て来るアスモ

「二番手はブラックローズからシャンデラのデリラ選手、雷蒼からはヘルガーのアスモ選手
ファイト！」

「っと！どうやらやっと戻ったみたいだな兄弟！」

いきなり一人で喋り始めたアスモ

「うん、まさか僕と君が混ざり合うなんて考えてもなかったからね

おっと自己紹介が遅れたな俺はディウス

そして僕がアスモ

『二人合わせてアスモディウス！よろしく！』

ところで兄貴俺達はあるに助けられたぜ！

あのままアスモの奴が操られてたら大変だったからな

つちよ！ディウス、君僕が操られたの知ってたの！だったら助けてくれたって……

それがよ、俺がアスモと交代出来なくなっちまって……

そうだったんだ、だったら仕方ないね

ところでデリラさん、僕アスモと戦うか

俺デウスと戦うか

『好きに選んで（選びな！）』

「……」

目の前で一人漫才を見せられたような物である、デリラはポカンと
している

「じゃあ俺と

僕

『両方で行くよ！（行くぜ！）』

『我に仕えし獄炎を司る者達よしばしの間その力を我に分けよ！』

そして、アスモとデウスは謎の言葉を呪文のように唱える

そして言い終わると同時にアスモを炎が包み込む炎が一瞬で消える
とそこには、背中に黒い炎でできた羽と白い炎でできた羽を持つア
スモが立っていた

『デリラさん行きますよ！（デリラ、行くぜ！）』

アスモはデリラに走りより、炎を纏わせた爪で切り裂く

「あんださつきから良くわからない事やって、精神科を進めるわ！」

デリラひふわりと宙に浮き爪から逃れる
しかし

『逃がすか！（逃がしませんよ！）【デスサイズ】！』

突如として宙に現れた黒い鎌それをアスモは口でくわえこむ上に振り上げる

デリラは紙一重でよける

「きゃあ！レディに武器を向けるなんて失礼しちゃうわ！『鬼火』」

デリラの周りを青白い火がゆらゆらと回り始める、そしてその青白い火をアスモ目掛け放つ

『美味しそうな火だな！』

しかしアスモはその火を吸収してしまった

『でも、これは返すぜ！』

そう言うアスモの口から通常より数十倍大きい鬼火をデリラ目掛けて放った

「つつわああ！」

鬼火は通常やけどにするだけなのだが、アスモが放った鬼火に当た

ったデリラは地面に倒れて目を回していた

「勝者アスモ選手！」

その審判の声と同時に会場が活気を取り戻した

「アスモ、良くやったぜ！」

それよりディウスとアスモって何なんだ？」

バトルに勝利したアスモに話かけるライト

「僕と

俺は

一人で二人なのさ！

これからは俺が喋るぜ、アスモは何者かに後ろから襲われた、その後アスモは洗脳された、その時俺はアスモを助けたかったんだが、いつもなら自由に出来る入れ替わりがロックされてたんだ、その後洗脳されたアスモは人を襲っていた

そこに現れた兄貴により頭を強く打った事で洗脳は解けた、しかしだ、体と思考の所有権がアスモに握られ、しかも俺とアスモが混ざり合っちゃったんだ、でついさつき

やっとの事で分かれる事が出来たんだよ♪

さらに俺達は

地獄で暮らしている

『悪魔なんだ』
「アスモの突然のカミングアウトに一瞬でその場が
氷ついた

ハチャメチャライフ5（前書き）

アスモディウスの喋り方を変えました

基本バトル時は今までどおり

バトル時意外はアスモとディウスの会話文を分けました

ハチャメチャライフ5

「あ、悪魔？」

グリーンがゆつくりと口を開く

「ん、そうだけど問題あるか？」

「ああ、なんで悪魔がここにいんだよ？」

「悪魔なんていっぱいいるぜ、兄貴たちと全く同じ姿だから気づかないだけだ」

「そうなのか……、後なんで俺がお前を起こした時に自分は悪魔だって言わなかったんだ？」

「あれだよ、軽い記憶喪失だ！」

「ふ〜ん」

ライトはまだ納得出来ていないようで考え込んでいる

「じゃあ、俺はそのまま出させて貰うぜ兄貴」

「ブラックローズは残り一人となってしまいました最後までやっぱりこの人だ！モニア！」

この言葉を審判が言っていると会場は一際盛り上がった

「どうやらモニアは凄い奴らしいな会場がここまで盛り上がるとは、アスモ気を付けろよ！」

「任せな！」

アスモの紹介が終わり敵側に出て来たのはロズレイドだった

「なんでお前がいるんだ！」

「君が出るとは予想外でした」

『パイモン……』

最後にアスモとディウスが声を揃えていった

「そうですね、私もあなたがたと会うとは予想外でしたから！」

モニアいやパイモンが言い終わると同時に審判がバトル始めの合図をした

『我に仕えし獄炎を司る者達よしばしの間その力を我に分けよ！』

『新緑の大地よその力を我の力に分けたまえ！』

アスモディウス、パイモンともに唱詠を開始

『よっしゃ、かかって来い！』

羽を付けたアスモディウスは空に舞い上がる

パイモンは自分の周りに棘のついた蔦を生やしその中心の花の中に佇んでいる

「私から行かせて貰うわ！」

そう言う蔦を空中に伸ばしアスモディウス目掛けて振り下ろす

『【デスサイズ】！』

アスモディウスはデスサイズで蔦を両断

「よそ見は禁物『マジカルリーフ』！」

『予想ずみさ！【火炎放射】！』

マジカルリーフを燃やし対抗する

『【ヘルスラッシュ】！』

その後アスモディウスはパイモンに接近、暗黒の力を纏わせた爪を振り下ろす

「『ニードルソード』！」

蔦の剣で防ぎ棘付きの蔦で後ろからアスモを狙う

「つく！アスモお前に任せる

よし！任せて『サイコネシス』！『ホーリーランス』！」

アスモはサイコネシスで蔦とパイモンの動きを止め神々しい光を放つ槍を生成しパイモンに投げつける

「つく！蔦よ！」

アスモは蔦に吹き飛ばされる

「さすがにそれは効くね……デウス！」

了解！『ダークネスフレイム』！」

黒い炎がパイモンを焼き尽くす

「キャアアア！」

パイモンは蔦の中心から吹き飛ばされ気絶した

「兄弟やったな！」

「うん、パイモンに勝てたのは初めてだよ」

「勝者アスモ選手！よってチーム雷蒼の勝利！」

「よっしゃ！アスモとデウスやったな！」

「ああ、兄貴あのモニアも悪魔だ、本当の名はパイモンだ」

「ああ、だからあいつにあった時デウスが……」

ライトはやつと状況を理解し悪魔の存在を飲み込んだようだった

「じゃあ、どんどん勝って行こうぜ！」

ライトの掛け声にみんなが答え第一回戦が終了した

ハチャメチャライフ6

バトルが終わった後パイモンに呼ばれた俺達は試合会場の外にある喫茶店に来ていた

「ところでパイモン、なんのようだ？」

「あなた、あのピチューとなんで一緒にいるの！」

「ん？兄貴の事か？俺は兄貴に命を助けられた、だから一緒にいる、つな？アスモ？」

俺はアスモに話かける

「うん、そうだよ」

「あなたはそのピチューが何者か分かっているの？」

『はい？』

つお！アスモもおんなじ事を考えたみたいだな！

当たり前じゃん、僕もパイモンが言ってる事が理解出来ないよ……

やっぱりお前もか……

そして、パイモンはため息を吐き出して話始めた

「あのピチューは知恵と力の神でかつ守護女神でもあるアテナの息子なの」

へへ、それがどうしたんだ？俺には関係ない事だし

パイモンは俺の反応を見て、有り得ないと言った表情を見せる

「だから、あのピチューはアテナの子供だから神々との戦争のさい敵となる存在、なのにあなたはその敵である奴と関わってるおかしいと思わないの？」

「全然、第一俺はもう悪魔側にも神側にもつかない、世界の終末の時は自分の命は自分で守り、終末が終わりしだいゆっくり過ごしたいからね」

「やっぱりね、そう言うと思った、でも気を付けるのよ」

パイモンはそう言うと言席を立ち喫茶店から出て行ってしまった……
って、飲み物代やらパフェ代は俺負担かよ！

俺はため息を吐き出し会計をすませ兄貴達が待っている所へ向かった「やっぱりね、そう言うと思った、でも気を付けるのよ」

パイモンはそう言うと言席を立ち喫茶店から出て行ってしまった……
って、飲み物代やらパフェ代は俺負担かよ！

俺はため息を吐き出し会計をすませ兄貴達が待っている所へ向かった

ハチャメチャライフ7（前書き）

今回は一気にいろいろな部分をっ飛ばして改正前の話に追いつきました（汗）

ハチャメチャライフ7

その後、ライト達は（ライトがアイアンテールで始まりの合図と共に一発で沈めた……）第二回戦、準決勝を順調に勝ち抜き、ついに決勝……

「グリーン、アスモ、ディウス、ついに決勝だ！気を抜かずに一気に勝ちに行くぜ！」

ライトが控え室でみんなに声をかける

「じゃあ、俺が行くぜ！」

ライトは自分から一番手を名乗り出てバトルフィールドに立つ

「今から決勝戦、昨年圧倒的な力を見せつけ優勝したチームラベンダーからメガニウムのミント選手！」

審判に呼ばれたミントは観客にツルを振っている

「対する、今回全くもって予測不可能な力で楽々決勝にたどり着いたチーム蒼雷からピチューのライト選手！」

ライトは腕を組みミントに挑戦的な態度を見せつける

「バトル……スタート！」

「まずは小手調べだ……」

ライトは尻尾を素早く振り衝撃波を生み出してそれをミントに向けて放つしかし、ミントはそれをツルで弾く

「お前、その攻撃を見切るなんてなかなかの使い手だな……」

実はライト、衝撃波を一回で大きな物と小さな物を繰り出しておりその小さな衝撃波で若干のズレを作り出していたのだ、衝撃波は目に見えないので聴覚などを使って衝撃波の道を読んで弾かなければならない、しかし衝撃波を聴覚で感じるなどほぼ無理だ、それを勘ではなくやってのけたミントは確実に他の奴らとは別格だと言う事だ

「僕は君の相手をしている場合じゃないんだ、そこをどいて」

しかし、ミントはライトの言葉を無視し道を空けると言うてきた

「は？」

突然の出来事に困惑するライト

「どかないんだね、じゃあ仕方ない……っおい！」

ミントが声を上げると空から何かが大量に飛んできた

「よし、プテラ達任務遂行の為だこの建物を破壊光線でぶっ壊しな
！」

ミントが上空のプテラに命令を下すとプテラ達は一斉に破壊光線を放った

「つてめ！畜生が！」

ライトは地面に手を当てると地面からいくつもの土の柱が階段状に表れた。ライトはそれに飛び乗り、一気に上空へと走っていった。

「糞共が！っ吹つき飛べえええええええ！」

ライトは手に電気をため極太の電気の光線をいくつもの破壊光線が集まつた白い光線に向けて叫び声を上げながら放った

電気の光線は破壊光線を軽々飲み込み勢いを増しながらプテラ達を
消し飛ばした

ハチャメチャライフ8

（つくそ！やっぱり駄目だ！体が莫大なエネルギーに付いていけない！）

ライトは片方の腕をもう片方の腕で押さえている、骨が莫大なエネルギーに負けて折れてしまっているのだ
しかし、そんな事構いなしにミントはライト達の控え室に向かっている

（っち！あいつの目的は知らねえけど、嫌な予感がする、どうにかしなきゃならねえ……一か八かの賭けだ……もう一発、もう一発だけだ！
耐えてくれよ、俺の体……）

ライトはボロボロの体を無理やり動かし土の柱から飛び降りミントの前に立ちふさがる

「へーまだ抵抗するんだ？じゃあ此处で消えてもらうね」ミントは口にエネルギーを蓄え始めたどうやらソーラービームを撃つつもりらしい、しかしライトは二カッと笑うとミントに向けてこう言い放った

「いや、消えるのはそっちだぜ！食らいつくせ！」大蛇【ミスガルドズ】

ライトが腕を後ろに構え莫大な量の電気エネルギーを蓄える、そして蓄えたエネルギーを腕を一気に前に突き出すのと同時に放出した

「っな！？く、くそ！『守る』！」

しかし莫大なエネルギーは巨大な蛇の姿に変貌し守るの薄い膜簡単に噛み砕き、そのままミントを飲みこんだ

「はあはあはあ、っち！体が…も…う動かねえ…や……」

ライトはそう言うのとバタリと地面に倒れた

「ライト！」

グリーンがライトに駆け寄ろうとする、しかし

「グリーン、行くな！」

ディウスが大声でグリーンに叫んだ、駆け寄ろうとしたグリーンはディウスの声にびくくりして立ち止まってしまった

しかし、グリーンが後一步踏み出していれば当たるといった場所に鋭利な刃物が飛んできたのだ

突然の事でその場にグリーンはペタンと座り込んでしまう

「グリーン！」

ディウスがグリーンの前に立ちふさがり飛んできたナイフを守るで防ぐ

「グリーン、平気か？」

グリーンはこくりと頷く

「じゃあ、ライトの所に行って介護してやれ！」

……そうだ！！この木の実を使い！」

ディウスはどこから出したのかオボンの実を数個グリーンに投げ渡した

そして、前に向き直り誰も居ない場所を見つめながら話しかけた

「さて、今ナイフを投げた奴、もう居場所はわかってるさつさと姿を表してもらおうか？」

ディウスがそう言うと、目の前の景色がグニヤリと歪み、一人のポケモンが姿を表した

「ふん、まさかこうも簡単に居場所がバレるなんて……
やっぱりあなたは油断ならないわね……」

そう言って表れたのは人型のポケモン、サーナイトだった

ハチャメチャライフ9

「アスモ、お前に任せるぞ……」

(OK)

「デウス、後は僕に任せてね！

そのお姉さん、一応バトルするんだし名前を名乗ろうよ？」

サーナイトは黙れとだけ言う気合い玉を打ってきたアスモはそれをジャンプでかわし、波動弾を口からサーナイト目掛け放つ

「ふゝ、いきなり攻撃してくるなんて卑怯だね、そんな事するなら僕本気ですよ？」

「だったら私も本気を出させてもらっ……」

『幻舞』……」

サーナイトのまわりに大量のナイフが何十もの輪になるように表れる

「行け……」

その言葉と同時に大量のナイフがアスモに前後左右隙間無く襲い掛かる

逃げ場を失ったアスモは目をつむりうずくまってしまった、しかしいくら待ってもナイフが突き刺さる痛みは襲って来ないアスモが恐る恐る目を開けると、目の前は一面黄色一色になっている

「え？し、師匠？」

アスモの目の前に立ちふさがっていたのはライトだったのだ

「ハアハアハア、間に合ったか……」

オボンの実のおかげで助かったぜ……」

オボンの実で回復したライトはアスモの目の前に立ちふさがりアイアンテールで自分達に当たる軌道のナイフを全て叩き落としたのである

「っち！邪魔が入ったみたいね、でも無駄よ……」

サーナイトはもう一度幻舞を発動させてライト達に向かってナイフを飛ばす

「くそ！この量は弾けない……」「『精霊の幻舞』！」

突如表れた謎の生き物がライト達の目の前に立ちふさがり剣でナイフを全て弾き返したのだ

「誰だ、てめえ？」

ライトは折れていない方の手を使って爆転をし、間に入ってきた者から距離を取る

「俺か？俺はフォック、只の旅人さ」

間に入ってきた青いゴーグルとスカーフを巻いたりザードンはそう答えた

ハチャメチャライフ10

「今回はじゃまが多いわね……まあいいわ、今後じゃまするような
ら容赦しないわ」

サーナイトはそう言うのとテレポートでどこかに行ってしまった

「何なんだよ……」

そう呟くライトにフォックが話かけた

「おい、そっちの手を出してみる」

ライトが恐る恐る折れた方の腕をフォックに差し出す

「こりゃひどい、まあ俺にかかれば一発さ」

フォックはそう言つとライトの腕に神々しい光を当てる

「ほら、動かしてみる」

しばらく光を当てた後、フォックがライトにそう言った
ライトが言われた通りに腕を動かす

「す、すげえ腕が動かせる……」

よっしゃ！そうなりや俺とバトルしろ！

うーん、でもお前は武器を持ってるな……そうだちょっと待ってる
！」

ライトは勝手に話を進めその場から走り去っていく

しばらくして

「つよ！待たせたな！」

ライトが再度そこに現れた時にはライトには大き過ぎるような、大剣を背負ってやって来た

「し、師匠？それをどこから……？」

「ん？これか？これは適当に落ちてたテスリや金属バットを無理やり叩いて剣の形にした奴だ、まあちょっとデカすぎかったかも知れないがな

まあそんな事より……フォックとか言ったな？さっさとバトルしようじゃねえか！」

ライトは大剣を抜き放ちフォックに突きつけた

ハチャメチャライフ11

「良いだろう、その勝負うけてたつ！」

フォックも剣を抜き放ちそのままライトに向かって振り下ろす
ライトは振り回された剣をアイアンテールで回りながらはじき、大
剣をその回った勢いに乗せて振り抜く

「つく！」

フォックは弾かれた剣を無理やり引き寄せて大剣を防ぐ、するとラ
イトが使っている大剣が真ん中らへんでポツキリと折れてしまった
「あちゃー、やっぱりすぐ壊れちゃうかあ、よしフォック！次の攻
撃で最後にしようぜ！」

周りで見ていたグリーンとアスモ達はもうかよ！っと言う顔で見
ている

「いやあ、さすがにこう何者かに襲われた後で誰もいない闘技場で
闘うのもなあ、って事で」

「よし、それに乗った行くぜ！！『ライト&ダークブレイド』！！」

フォックは剣に光と闇を纏わせて突っ込んで来る

「じゃあ遠慮なくいかせてもらうぜ！」

ライトは氷を剣状に伸ばして、これもまた氷で出来ている鞘にいれ
て背中後ろに隠す

ライトはその状態で細かい氷の粒を散らしながらフォックに走っていく
するとライトがフォックの目の前で影分身のようにツサッと二人に分かれて両サイドから切りかかった

（何！？でも俺は波動を読めるんだ、分身なんかす……な、なんだ両方から波動を感じるなぜだ！？）

フォックは分身したライトに驚きを隠せない
しかし

（ん？波動は感じるが右側には影がない？だったら……）

「っは！」

フォックは左側のライトに切りかかりそのまま逆方向のライトに尻尾を使って叩きつけに行った

しかし、フォックは自分が分身じゃないと思った方を斬りつけた時に全く手応えが無いのに気付いた、そして保険の為に尻尾で攻撃しておいた方も同様に手応えが無い事に

「よっしゃ！もらった！」

突如として右側からライトがフォックの脇腹を氷の剣で斬りつけた

「よっしゃあ！これで俺の勝ちだ！」

フォックはまだ倒れていないが、自分が手を抜いたとは言えライトが本気で斬りつけていたら自分の命が危なかった事がわかり負けを認めた

「ライト君って凄い強いな！今の技はなんなんだよ！？」

（こいつはもつと伸びる、多分伝説や神と呼ばれしポケモンとは簡単に渡り合えるようになる筈だ、さらに本気の俺と多分いや絶対に互角に戦えるようになる筈だ）」

今までとは違い明るく話かけてくるフォックにライトは一瞬戸惑ったが手を差し出しフォックと固く握手を交わした

「師匠凄いや！！」

「ライトってやっぱり強いんだね！！」

仲間達と楽しそうに話しているライトを眺めていたフォックがライトに話かけてきた

「よければ俺もライト君達と一緒にいきたいんだけど、いいか？」

「勿論だ！宜しくな！」

返事はこう言われるのが分かっていたかのように即答だった

「ああ宜しくな！」こうしてライトのパーティーにフォックが加わり、グリーンの意見でさっさとここから出て行くこととなった

「ところでさ、あいつ等はなんでいきなり襲ってきたんだろうな？」

いろいろあり警察がやって来ている闘技場を尻目にライトがそんな何気ない話題を持ち出した

勿論ライトやグリーン達は分かるはず無いじゃんなどとなり終わると思っていたのだったが、ここでディウスが予想もしない事を口にした

「ん？ああ多分俺等の……だと思っぜ」

この話を聞いて全員が立ち止まってしまった

ハチャメチャライフ番外編1

なんか、ライト側の物語が途中で書けなくなったので、別のキャラクター側の物語です！
どうぞ！

太陽がさんさんと降り注ぐ中、一人のポケモンが森の中をスキップをしながら進んでいた

「やっぱり、この森に來ると落ち着きますね」

そう言ったのはイーブイと言う種族のポケモンだ、ただ普通のイーブイとは違う部分がある、それは毛の色だ普通茶色である部分は銀色で、うすい茶色の部分は真っ白だ、通常色違いと言われており、珍しいという事もあり金目当ての輩がさらっていき人身売買などに使われたりするなどという事も起きている

そんな危険も有ると言うのにこのイーブイは一人で森に來ているのだ

「さあ、今日はここらへんでご飯を食べるとしますか」

独り言が多いと思うが誰だって人が一人も居なくて、とても居心地が良い場所に來るとひとりでに独り言が出てしまうと言うものだ
無駄な解説らしき物も入ったがイーブイは、下げていた肩掛けバックからお弁当を取り出すと切り株に腰かけた

「おい、そこのお嬢ちゃん」

さつき言つたように色違いは誘拐などに会いやすい、多分この輩もそういう輩の仲間なのだろう

まあ、そんな怪しい奴がお弁当を広げているイーブイの目の前に突然現れた

「人を尾行するなんて趣味の悪い人ですね、それに僕は女じゃありませんよ、男です

女だと思って尾行していたとしたらただのロリコンですよ？それとも僕が男と知りながら尾行してた？うわゝシヨタコンですか？僕ちよつと吐き気が……」

「てめえ、言わせておけ」まさか僕を森の奥まで追い込んでピーーをしようとしてたんですか？

でもってプーしたりピーーしたりれっきとした犯罪ですよそれは、本当に僕あなたみたいな変態は大嫌い何ですよ」

相手に話させる隙を与えずに矢継ぎ早に話すイーブイ途中、放送禁止用語が混じっていた気もしますがそこは、さらっと流しましょうただこんな事を言われて黙っていないのが相手

「一旦黙りやがれ！！本当に好きに言わせておけば」

反撃に入ろうとするがイーブイはその続きを言わせない

「まだ居るんですか？さつさとお家に戻って一人寂しく処理して下さい、僕の写真はいくらでも撮らせてあげますからね？女豹のポーズだつてしてあげますから、僕男ですけど、あなたはそっち派何でしょう？ちつちやな男の子大好き何でしょ？」

「じゃあ、有り難く……おおゝ、って有り難く撮らせてもらっ「や

っぱりそっちの方向でしたか……」

相手は嬉しそうに写真を撮り話そうとするがイーブイがまた遮る
相手は言い忘れたがバシャーモだ

「ああ、焦れたい！食らえ『火炎放射』！」

「ああ、もう無駄ですよあなたの周りに結界を張らせてもらいました、攻撃すれば倍の数になって跳ね返ります、しかも威力は変わらずに」

バシャーモが技を中断して周りを見ると確かにうすい膜が周りを覆っていた

そして放った火炎放射が結界で跳ね返り2つに増えて帰ってきた

「もうわかりましたね、そうなれば結界の中で技を出せば中で数がどんどんネズミ算式に増えていきます、まあ、もう教えても無駄みたいですけどね」

バシャーモがいる結界の中はもう火しか見えないそして耐えられなくなつた結界が弾け飛ぶと同時に大爆発を起こす

「しかも、僕が指示すれば結界の強度は変更出来る、強度は無限に上げれるので指示すれば絶対に壊れる事はありませんね」

イーブイはもう聞いている筈の内相手に話かける

「また、結界内には僕自身で技を発動できます
どうです？凄いでしょ？」

「あ、僕はソウと言います、まああなたはもう聞こえてすらいない

と思いますけど

ふう、疲れた疲れた邪魔も居なくなっ
たしお弁当の続きでもしまし
ようかね」

イーブイは一人笑いながら切り株に腰掛け直した

ハチャメチャライフ ソウ君「お遊び編」(前書き)

なんか気まぐれで遊びました、ソウ君のキャラ崩壊度が激しいです、それにただのお遊びです見たく無い人は早速バックボタンを連打！

ハチャメチャライフ ソウ君「お遊び編」

「うわゝ、なんですかこれは、作者さんに文句言ってやりますっあ、もしも作者さん？ひどいじゃないですか！今回の僕のストーリー」

『ひどいつて何が？性格が？』

「グヘエ、違いますよ、お遊びですよお遊び、あまりにも僕が変人ぽかったじゃないですか！」

『えゝどこどこ、どこらへん？』

「始まってすぐの場所ですよ！僕が森の中をスキップであるいて行く所ですよ！あまりにも独り言が過ぎますよ！」

『あゝ本当だ、やっちゃった』

「いや、やっちゃったじゃ無いですよ！それにまだあるんですよ、お遊びは！…！」

『えゝ本当？どこらへんなの？』

「僕が相手の変態さんに話す隙を与えない所ですよ！あのピープー音何ですか！？僕の方が変態みたいじゃないですか！っあ、『もうやっちゃった』とか言わないで下さいね」

『やっちゃったぜ』

「いや、ちょっとカツコ良く言わないで下さい！それに最後の
んですか？キラーンって効果音が聞こえましたよ
後、お遊びはまだあるんですよ！

僕が変態さんにまだ話す隙を与えない所ですよ！女豹のポーズって
なんですか！」

『やつちゃったぜ 』

「なんですか？その言い方気にいったんですか？」

『気にいったんだぜ とつちゃだぜ 』

「取りませんよそんなしゃべり方！」

.....

つと長々しく、ソウ君の作者への苦情は続きました

「ああもう、なんかもう、やってられないんだぜ」 b y ソウ

なんかこのまま続けているとソウ君からキャラ崩壊の苦情が来そう
なので一時退散させていただきます

ハチャメチャライフ12（前書き）

今回はかなり無理やりな進め方です

どうぞ！

ハチャメチャライフ12

「ちょっと待ってくれ、デウスなんて言った？」

「いや、だからあいつ等の狙いは俺等の」

「デウス！！言っちゃ駄目だよ！！サタンからも口止めされてるじゃん！」

「アスモ引っ込んでろ、何回も入れ替わってたら兄貴達が混乱しちまうだろ！！第一今回兄貴達があいつ等を邪魔した事で絶対に目を付けられてる、どっちにしろいつかは知る事になるんだ、だったら今教えた方が良いじゃねーか
さあもう一度言うぞ、あいつ等の狙いは俺等の持っているこの宝玉だ」

デウスはまたどこらかともなく蒼く輝く握り拳ほどの球を取り出した

「これは、伝説のポケモンカイオーガを使役出来る宝玉だ、あいつ等はこの宝玉などを使い、今の世界の生き物をが一匹残らず消そうと考えているんだ

しかし、俺等アスモデウス、七つの大罪の一人憤怒のサタンそして、同じく七つの大罪の内の一人暴食のベルゼバブその他の一部の悪魔や天使、神々はその戦争に反対しているんだ」

「ちょっと待ってくれ」

突然ライトがデウスの話に口を挟んだ

「そのあいつ等の正体と戦争について説明してくれ意味がわからない……」

「あいつ等の正体は天使悪魔、神々だ

そして戦争は……この世界の全生命体を滅ぼしその世界を神々と悪魔、どちらが新しい世界を築くのかを決める争いが俺たちが言う戦争だ……」

その場がシーンと静まり返る

「だったら俺たちを作ったアルセウスとかが俺たちを消し去ってまた新しい生命体を作ろうとしてるのか？」

「まあ、半分はあつてる、だがお前たちを作ったのはアルセウスじや無い、アルセウスやパルキア、ディアルガは神々の力の一部を授かっているだけで本当は時間の流れなどが変に変わらないように保っているだけの存在だ

当然普通のポケモンより張るか上に行く力を持っている、しかしだ今あるこの世界を作り出したのは最高神ゼウスやその兄であるポセイドンとヘルだ」

「ダメださっぱりわからねえよ」

ライトは頭を抱え考えこんでしまう

「じゃあ、アルセウス達はたんなる象徴って訳か……」

今まで黙って聞いていたフォックは思いついたように呟いた

「ああ、そうだ

それとお前ディアルガの力を持つてるだろ」

「っえ！なんでわかったの？」

フォックは驚きの声を上げた

「そりゃ、お前がライトに使った治癒の技がディアルガ特有の技の波長に似ていたからだ

後、お前さつさと逃げ出した方が良いぞ」

「理由を教えてよ」

「そりゃ、俺と同じように技の波長を感じとれる奴はわんさといやがる、そうするとゼウスがいつお前の存在に気づくかも分からねえそして、もし気づいたら絶対にお前をぶっ潰しにくる

そうすれば、言っちゃ悪いが俺たちに迷惑がかかる、例えば……今の状況みたいにな！っち、もう気付きやがったか……」

そう言われて、ライト達が辺りを見回すと様々なポケモンに囲まれていた

「ディウス、これ全部天使とかか？」

ライトが氷の剣を作り出しながらディウスに問いかける

「ああ、しかも中にはかなり位が高いのが混じってやがる……

あの一番偉そうにしている奴は座天使長スローンズラファエルだ

これが智天使とかじゃなくてよかったな、お前等じゃ歯ケルビムが立たないからなあいつ等は、それにそのさらに上に位地する熾天使セラフィムだったら

「お前等は即死級だからな」

デウスはライト達に相手の危険性を伝える

「おい、アスモデウス随分と余裕そうじゃないか？」

背中に真っ白い翼が生え一枚の布で体をくるみ服としている人間が、アスモデウスに問いかける

「お前だって、ポケモンの姿をとらずに自分の本の姿をとるなんて余裕そうじゃないか」

「確かにこの姿よりポケモンの姿をとった方が身体能力が上だな、でもポケモンって四足歩行の奴が多いだろ？なんか慣れなくてさ」

「で、お前等の狙いは？」

「もちろん、あのリザードンさ」

ラファエルはフォックを指差して言う

「っあ、そうだ後あのピチューだな」

「な、なんで俺等が」

自分も狙われている事に驚いたライトがデウスに尋ねる

「それは後で話す！今は周りの奴等に集中しろ！」

「わかった……フォック！死ぬなよ！」

「わかつてるよライト君！
行くよ！『無効の時』！」

フォックは自分の目の前にいる天使ミニロップに対して無効の時を使った、ミニロップの動きが止まる
しかし、

「本当にディアルガの力が使えるみたいね、でも私達には意味は無いわよ」

ミニロップは無理やり抜け出しフォックに気合いパンチで殴りかかってきた

「つく！」

フォックはドラゴニックセイバーを盾にして気合いパンチを受け止める

「なかなかやるようね、でもこれはどう？」

ミニロップはいくつもの光弾を放ってくる、フォックはそれをドラゴニックセイバーで弾く

「食らえ！！『火炎放射』！」

フォックはミニロップに火炎放射を放つがミニロップは上空にジャンプして簡単によけてしまった、が

「ナイスだ！フォック！」

ミニロップが飛んだ先にはライトが待ち構えていたのだ、ライトは体を回転させミニロップの脳天にアイアンテールをヒットさせる、ミニロップは下に叩きつけられた

「つく！そ、そんな私がただのポケモンなんか……」

ミニロップはそこまで言うとは動けなくなった

そのころアスモディウスは、ラファエルが呼び出した天界の化け物相手に苦戦を強いられていた

「うち！ラファエル、お前自身は戦わないのか！」

「当たり前でしょ、面倒じゃん？」

「じゃあどっか行けよ！って、危ね！」

化け物（グリフォンぽいデカイ奴）が放つ炎の弾をディウスは空に舞い上がってギリギリで避ける

「『黒炎弾』」

ディウスが真つ黒な炎の弾を化け物に放つが化け物はそれを簡単に避けてしまう

「どうすりゃ良いんだこいつ……」

ディウスがあきらめかけたその時

「おいおい、七つの大罪ともある奴がこんなのに苦戦しちゃってん

の？」

「そうそう、あんたそんなに弱かったけ？」

バクフーンとキルリアが化け物の腹に一撃で風穴を開けたのだ

「サタンにベルゼバブ！どうして此处に、っと、その前に随分と派手にやっちゃったな……」

「ん？駄目だったのか？」

「俺はお前のためにやっただぜ？」

「ああ、まだあのピチュー達は殺しと言っのに馴れてないんだ」

デウスがライトを指し説明する

「っえ？あいつ等天使殺したぜ？」

デウスにベルゼバブと呼ばれたキルリアは驚きの声を上げる

「は？」

「ほら、あのミミロップ死んじゃってるぜ？」

デウスは地面に倒れているミミロップを確かめみる

「確かに死んでる……」

「で、ライト達はどこに？」

「ライト？あああのピチューか、ライトなら……ほらあそこに」

サタンが指差した先にはラファエルと戦っているライトとフォックが見えた

「で、フシギダネはあそこ」

グリーンは地面から生える巨大な弦を操り、天使達を蹴散らしていた

「デウス、お前の仲間はイレギュラーな奴らばっかだな
でも、ライトとリザードンはラファエルに押され気味だぜ」

「そんなの見りゃ分かる！」

デウスはラファエルと戦っているライト達の下へ走っていった

ハチャメチャライフ13（前書き）

久しぶりの更新です

ハチャメチャライフ13

アスモディウスが話している間のライトとフォックはと、言つと

「よっしゃ!! やったぜ!」

ライトがガッツポーズを決める

「意外に弱かったね、そうだライト君あのリーダーばい奴を倒さないかい?」

フォックが言ってるのはラファエルの声だ

「あいつか、よし! やったろうじゃねーか!」

ライトは小手調べだ! と言つとラファエルの目の前に飛び出て、フォックと戦った時に使った技を繰り出した

「こっちか!」

ラファエルが右のライトに剣を振り下ろす

「残念だな! 俺はこっちだぜ!」

ラファエルの剣は空を切り、ライトがラファエルの腹を氷の剣で切り裂く

「名付けて『氷刀霞切り』」「ライト君、今頃技名決めたんだ……」

「いや、良い名前が浮かばなくってさ」

ライトは頭をかく

「くそ！よくも俺の体に傷を！」

ラファエルは氷刀霞切りが当たったのにも関わらずピンピンしている

「『白龍の翼』！」

フォックの翼がレシラムの翼に変わる

「無駄な、小細工を」

ラファエルは翼の羽毛を鋭い刃物の様にしてフォックに放った

「『光の剣雨』！」

フォックは神々しく光る剣をいくつも飛ばし対抗する、が

「つく！」

ほとんどの羽毛が相殺されずに向かってくる、フォックはそれを旋回して避けようとするが避けれずに数枚の羽がフォックの腕などに突き刺さる

「後ろが、がら空きだぜ！『アイアンテール』！」

ラファエルは剣でアイアンテールを弾く

ラファエルはそのまま剣でライトを突き刺そうとするが

「残念、兄貴は攻撃させねえぜ」

「リザードンとピチューには俺が手を出させねえぜ！」

「雑魚は雑魚なりに頑張ったみたいだな」

ディウスが剣を弾き、ベルゼバブとサタンがラファエルを取り囲む

「うち！分が悪いな…… 今後はこう上手くいくと思うなよ！」

ラファエルはそう言うとその場で消えるように居なくなってしまった

「うち！逃がしたか……」

サタンが舌打ちをする

「まあまあ、みんなが無事に終わらせれたんだ、ありがたいもんだぜ」

「第一なあのリザードンさえいなければ俺達が襲われる心配もなかったんだ！」

「そんなこと言わずにさ、かくまってやろうぜ」

「はあ！？こいつを俺等の隠れ家に連れて行くのか？そんな事したら今までずっとあいつ等から隠れて来た意味が無くなんじゃねえか！」

「大丈夫だって、結界張って波長を隠せばさ」

「もしこいつが力を使えば一発だすぐにばれる、俺はこんな奴と一緒にに居るのはゴメンだぜ！」

「そんなら「黙れ！糞尼が！俺は……ぜ……あ、あのベルゼバブさん？その鎚は何でしょうか？」

「誰が女は力が無くて足手まといだあ！テメエ今日と言う今日は許さねえ！覚悟しやがれ！」

どうやらサタンがベルゼバブに言うてはいけない単語を言ってしまったようで、ベルゼバブは巨大な鎚を振り上げてサタンに振り下ろすサタンはそれを必死で避ける

そのまま、サタンとベルゼバブの鬼ごっこが始まってしまったそんな二人を無視してライトがディウスに質問をする

「倒したと言うか死んだ天使達は放置してきたけどいいのか？」

「ああ俺達は死んだら消えて行く血も骨も残さずにな、ただ俺達についている宝石などは残るんだ俺は胸の真ん中にブラックダイヤモンドがある」

ライト達がディウスを良く見て見ると体の色と同化してる為気付かなかったが確かに漆黒のダイヤモンドが胸に埋まるようについていた

「ほ、本当に付いてるんだな……」

「後、お前に質問だ何故殺せたんだ？」

ライトはディオスのその言葉を聞いて顔を曇らせる

「……それには触れないでくれ」

「悪い事聞いちゃったなすまなかった」

「それでどうするんだ？このままじゃ又襲われるぜ」

「だね、俺もこの波長を隠すために技の使用は控えるよ」

「結界はアスモの得意分野だちょっと待ってる……」

少し間を置きディオスの雰囲気ガラリと変わる

「ふう、じゃあ結界を張るよ……」

フォックの周りに光輝く粉が降り注ぐ

「よし、これで暫くは平気だね……もう暗くなってきたしここらへんの森で野宿しなきゃ、おゝい二人とも集まって今日は野宿するよ」

死の鬼ごっこをしていた二人を呼び戻すとライト達は道から外れた所にある森の中に入っていった

ハチャメチャライフ13（後書き）

完璧に影になってるグリーン、哀れWWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2513o/>

ライトのハチャメチャトリップ ライト達の旅改正版

2011年10月6日10時29分発行